

第十二回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

宇都宮 芳明 著『カントと神 理性信仰・道徳・宗教』

(1998年10月12日 岩波書店 刊)

宇都宮 芳明 うつのみや よしあき 昭和6年(1931)生まれ。平成19年(2007)没。東京都出身。

専攻は、哲学、倫理学。東京大学文学部卒業、同大学大学院人文科学研究科哲学博士課程単位取得退学。北海道情報大学教授・北海道大学名誉教授(受賞時)。著作は、『哲学の視座』、『人間の間と倫理』など、訳書に、カント『永遠平和のために』、訳注・カント『判断力批判』、他がある。

受賞のことは

このたび、あまり人目につくこともない私の著書『カントと神』で、はからずも和辻哲郎文化賞を頂戴し、まことに光栄に存じます。今年私は数えて古稀に達しました。われながら驚いていますが、しかし一七二四年生まれのカントが第四の主著『宗教論』を発表したのは、ちょうど今の私の年頃ですし、『永遠平和のために』を書いたのが一七九五年、長年にわたって講義し続けてきた『人間学』をとりまとめて本にしたのが、一七九八年です。この偉大な哲学者のひそみにならない、私も今回の受賞を機に気分を新たに、遣り残している仕事の完成にむけて、今後も精進を重ねたいと存じます。どうもありがとうございました。

《選考委員評》

湯浅 泰雄

この本の特色は、倫理学を基本においてカントの哲学を体系的にとらえているところにある。従来のカント研究では、近代科学の方法論的基礎をあつかった認識論の問題が重視される傾向がつかった。つまり理論的場面ではたらく理性のあり方と論理学の問題に関心が偏っていた感じがある。これに対して著者は、実践理性に基づく「人格」の尊厳という主題を中心にして、道徳論から宗教論へと展開してゆくカントの思索の過程を綿密に明らかにしている。著者の姿勢は、自分の独自の解釈を加えることではなくて、あくまでカント自身が考えていたことの意味を明らかにしようとするところにあるが、それによって「理性による信仰」というカントの宗教哲学の基本的な考え方が大変よく明らかにされている。現代の社会には倫理や宗教をめぐる思想的混迷がみられるが、そういう状況に対しても意義のあるものと思われる。

私としては、『実践理性批判』から『判断力批判』へ、つまり人格の能力を道徳的行為の領域から芸術における「美と崇高」の感情の問題を通じて宗教の領域まで展開してゆくところに興味を覚えた。そこでは、「人格」の尊厳ということが抽象的な事柄ではなく、心理学的実質をとまなう向上の過程としてとらえられている。カントの倫理学と宗教哲学の関係は、その理論的つながりについていろいろ論議されている問題であるが、著者の見解の一貫性には教えられるところが大きい。

坂部 恵

一九九〇年の秋にたまたま学術交流のために来日したスウェーデンの私と同世代の旧知の政治学者が、感慨をこめて以下のようなことを語っていた。自分らヨーロッパの政治学者のうちだれひとりとして、前年のベルリンの壁の崩壊や、またその翌年すなわち当の九〇年の夏のソヴィエト連邦の解体という事態を明確には予測できなかった。その意味で自分たちは未だかつて経験したことのないような無力感にとらわれている。ところで、しかし、あなたはまだ御存知でないかもしれないが、今ヨーロッパで、ひとびとはあらためて熱心にカントの『永遠平和のために』を読み、それを素材にしてヨーロッパと世界の未来について論じ

はじめている。

およそこのような歴史の展開の文脈の中で、ここ一〇年ほど、国民国家という単位にとらわれぬカントの「開かれた」社会・政治思想のアクチュアリティがにわかに注目され、論じられ、また研究されるようになった。それと同時にまた、「永遠平和のために」ということばが元来墓碑銘のためのものであり、一つ間違えば「殲滅戦」の果てに人類全体の墓標となりかねないことを警告しつつ論ずるカントが、一九世紀流のユートピア主義者であるよりは、むしろマキアヴェリも顔負けするほどの冷徹なリアリストの一面をもつこともまた、あらためて思い起こされることになった。

こうしたカントの平和思想は、今回の受賞作で宇都宮氏が委曲をつくしてあきらかにされているように、およそ「理性」をみずからの一環として組み込むことのない宗教は端的ににせものである、という「理性信仰」の教説と不可分の一体をなして発想されていた。（この宗教思想もまた、どこやら現代日本の新々宗教のあるものを思い出させぬでもない、カントと同時代の宗教的「熱狂主義」の流行に対抗して築かれた、したたかなものだった。）こうした骨太なカントの哲学の骨格を見事に浮き彫りにしたのが、今回の受賞作である。

### 濱井 修

本書は、カントの「理性信仰」という言葉を、彼の道徳と宗教についての思想を統合的に解説するためのキーワードと考えて、これをカントの著作全体にわたり周到綿密に精査し、倫理学と宗教論とを統一的に捉える著者独自の視点を提出した力作である。

著者によれば、カントにおいて道徳と宗教は相互に緊密に結びついているが、それはカントという人物の根源的なエートスに由来する。そうして、この道徳的心術と一体になっているのが理性信仰なのである。だから、理性信仰に注目することによって、カントの道徳論と宗教論とが切離しがたく結び付いていることが明らかになると言う。

しかし、著者のカント読解は、必ずしも大方の認めるところとは言えない。むしろ、こうしたカント理解は彼の本領である自由と自律の思想を不当に過小評価して、古い神中心の思想に逆戻りさせるものではないか、との疑問を抱く向きもあろう。実際、カントが道徳の最高原理を意志の自律におき、神の意志に従うことを「他律」として斥けていることを論拠として、彼の倫理学と宗教論とを切離して考える方が普通かも知れない。

だが著者は、敢えてそうした常識的解釈に抗して、道徳と宗教の内的連関に注目する立場こそ、カント思想の正しい理解だと強く主張する。この理解を論証すべく、著者はカントの全著作を通覧し、彼がその哲学的営為の中で常に英知界の道徳的主宰者たる神を望見していたこと、神の問題こそ彼の全人格を賭けて対決した根本問題であったことを突き止める。カントにとって、道徳的に生きることと、神を信じ、神の命令に従って宗教的に生きることとは、二つの異った生き方ではなく、同じ一つの生き方だったのである。

本書は、倫理学と宗教論を統一的に理解するカント解釈を提示した傑作として、今後の研究者の必読の文献であるばかりでなく、一般に道徳と宗教との関わりをどう考えるべきかという、二十一世紀を迎えようとする現代においても私たちが避けて通れない難問を解く上でも、有力な手掛りを与えてくれる作品である。